

## 上川アイヌのチセにおける建設技術の記録作成に関する研究

主査 岡崎 瑠美<sup>\*1</sup>

委員 清水 郁郎<sup>\*2</sup>, 山船 晃太郎<sup>\*3</sup>

本研究は、上川アイヌの伝統的住居「チセ」の建設技術を記録し、保存と継承を支援することを目的とする。現代の復元チセに焦点を当て、旭川市の嵐山チセおよび上川町チセの建設工程を調査し、実測や写真測量を用いた 3D モデル作成を実施した。さらに、アイヌ文化の伝統的技術と現代の工業製品や工具の併用について分析し、技術の保存と効率化のバランスを考察した。本研究は、口頭伝承に依存する技術記録の不足を補い、次世代への技術継承を促進するものである。

キーワード：1) 北海道, 2) 旭川市, 3) 鷹栖町, 4) 上川町, 5) アイヌ, 6) チセ, 7) 復元展示

### DOCUMENTATION OF KAMIKAWA AINU'S CHISE CONSTRUCTION TECHNIQUES

Ch. Rumi Okazaki

Mem. Ikuro Shimizu, Kotaro Yamafune

This study documents and supports the preservation of Kamikawa Ainu *chise* construction techniques. Focusing on reconstructed *chise* in Asahikawa City and Kamikawa Town, it uses measurements and photogrammetry to create 3D models. By analyzing the integration of traditional methods with modern materials, the study highlights the balance between preservation and efficiency. This documentation complements oral tradition, aiding the transmission of these techniques to future generations.

#### 1. 研究概要

##### 1.1 研究の目的と背景

本研究は上川アイヌのチセ<sup>注1</sup>を対象に現代に伝わる建設技術の記録を作成することを目的とする。上川地域に限らず、現在チセに住まう人は存在せず、チセは復元展示物として博物館等に教育や観光、文化振興の目的で建設されている。本研究で扱うチセも全て復元展示物として建てられたものである。

上川アイヌのチセは、2018 年に文化庁が認定する日本遺産事業において「カムイと共に生きる上川アイヌ～大雪山のふところに伝承される神々の世界～」の構成文化財の一つとして登録された。屋根と壁をクマイザサで葺いていることが特徴で、審査において独自の建築が評価された経緯がある。

一方で、アイヌ人口が多く観光客も訪れる二風谷では、平取町立二風谷アイヌ文化博物館に 10 棟以上の復元チセが建ち並び、毎年 1 棟の建て替えを行うことで技術継承と人材育成を図っている。それに対し、上川地域には 6 棟のみが現存しており、それらも 15～20 年に 1 度の建て替え時のみ技術伝承が行われているに過ぎない。また、アイヌ人口の減少と高齢化により、伝承者の減少も顕著であり、技術継承の困難さが増している。これら

の背景を踏まえ、本研究は限られた建設機会を支援し、未経験者にも理解しやすい技術記録を作成することで、上川アイヌのチセ建設技術の保存と継承に貢献することを目指す。

##### 1.2 研究の対象

アイヌ民族は地域単位の呼称があり、上川アイヌの自称をアイヌ語では「ペニウクル」<sup>注2</sup>という。上川アイヌのコミュニティにおいて「上川アイヌのチセ」として認識されているものは、日本遺産の構成文化財として登録されている 6 棟の復元展示チセである。(表 1-1) これらの内、本研究調査は最も建設時期が新しい 2 棟のチセを対象とする。

アイヌは文字を有しないため、文化の伝承は口頭によって行われてきた。建設においても伝統的には文字や図面は用いないとされており、これまで建設されてきた復元チセにおいても、文字や図を用いた記録は限定的である。本研究では最も建設時期が新しい 2 棟のチセに焦点を当て調査を行った。

最初の対象は旭川市博物館分館・アイヌ文化の森・伝承のコタン内にある 3 棟のチセの内最も規模の大きいポロチセ（以下、「嵐山チセ」と略称）である。嵐山チ

<sup>\*1</sup> 芝浦工業大学建築学部建築学科 准教授 <sup>\*2</sup> 芝浦工業大学建築学部建築学科 教授 <sup>\*3</sup> 九州大学比較社会文化研究院 共同研究者

セは 1982 年に建設されてから数年おきに建替えが行われてきた。<sup>注3)</sup>本研究では 2022 年 4 月から 9 月にかけて実施された老朽化に伴う建て替え工事を契機に、建設記録を追跡し、関係者へのインタビュー調査を実施した。

次に、上川町に所在する旧北の森ガーデン内のチセ（以下、「上川町チセ」と略称）を対象とする。このチセは 2016 年に建設され、その際の設計や工事記録として写真や図が残されており、これらの資料は一般社団法人ペニウンクル<sup>注4)</sup>が保有している。本研究ではそれらの資料を整理し、関係者へのインタビューを通じて、建設過程と技術伝承について明らかにすることを目的とした。

表 1-1 上川アイヌの復元展示チセ 6 棟

| No. | 所在地                             | 建設年    |
|-----|---------------------------------|--------|
| 1   | 旭川市博物館分館アイヌ文化の森・伝承のコタン（旭川市，鷹栖町） | 1972 年 |
| 2   |                                 | 1972 年 |
| 3   |                                 | 1982 年 |
| 4   | 旭川市博物館（旭川市）                     | 1993 年 |
| 5   | 川村カ子トアイヌ記念館（旭川市）                | 1985 年 |
| 6   | 旧北の森ガーデン（上川町）                   | 2016 年 |

\*建設年は最初に建設された年を示す。<sup>注5)</sup>

1.3 研究の方法

本研究は、上川地域における 2 棟のチセを対象に、以下の方法で調査研究を実施した。

＜嵐山チセ＞

- ① 資料収集：嵐山チセに関する既存の資料を収集し、建設過程に関する情報を整理。
- ② 建設記録写真撮影：2022 年 5 月， 7 月， 及び 2023 年 7 月に，建設過程を記録するための写真撮影を実施。
- ③ 実測調査：
  - ・建方終了時の実測（2022 年 5 月）軸組構造が完成した時点で，建物の構造状態を詳細に実測した。
  - ・建設終了後の実測（2023 年 7 月）チセの建設が完了した後，竣工したチセの実測を行った。
  - ・いずれの実測も手実測と写真測量を併用した。
- ④ インタビュー調査：所有者である旭川市博物館と建替え工事に関わった棟梁の工藤氏をはじめとする「チセ等補修実行委員会」の関係者に対し，建設過程や建設体制について聞き取り調査を行った。

＜上川町チセ＞

- ① 資料収集：上川町チセに関する既存の資料を収集し，建設過程や設計に関する情報を整理した。
- ② 過去の建設時における資料の整理：2016 年に行われた建替え工事の際に作成された写真や図面

を整理し，これらの資料をもとに建設過程を分析した。

- ③ 実測調査：2022 年 7 月に，上川町チセの実測調査を手実測と写真測量を併用して実施。
- ④ インタビュー：チセ建設に携わった棟梁の伊澤修一氏に対して，建設過程や技術的な側面について聞き取り調査を行った。

1.4 既往研究

考古学調査で発掘されたチセ<sup>注6)</sup>と復元チセの相違点については今後更なる研究が必要である。本研究は展示物として制作された復元チセに焦点を当てる。住居として実際に使用されていた頃のチセの建設ノウハウが現在の復元展示されているチセにどれ程継承されているかは定かではない。本研究は復元展示されているチセの記録をより詳細にありのまま残すことを目指す。

上川アイヌの復元チセについてはいくつかの既往研究が挙げられる。旭川竜谷高等学校郷土部が旭川市の復元チセについて 1968 年に尾沢カンシヤトク氏へインタビューを行い，建て方の図を含む数ページの報告書を作成している。同部はその後 1996 年に杉村満氏とその妻であるフサ氏の指導を受けチセのミニチュア制作を通じて建設過程を図に残している。平沢勇は 1986 年にアイヌ文化の森伝承のコタン内のチセの屋根について構造的強度に関する調査を行っている。由良勇は川村カ子トアイヌ記念館のチセ再建の過程を中心に写真や図をまとめている。

2. 嵐山チセ

2.1 嵐山チセの概要

嵐山チセは寄棟造平入の木造平屋建であり，屋根と壁は共にクマイザサ葺である。母屋とセム<sup>注7)</sup>から成り，母屋の寸法は桁行 6,960mm，梁間 6,165mm，セムの寸法は桁行 3,990mm，梁間 3,670m，建築面積は約 57.54m<sup>2</sup>である。

2022 年に行われた建替え工事は，同年 4 月から建材の準備が開始され， 4 月末には約一週間で躯体工事が完了した。その後 5 月 7 日から笹葺が開始され， 9 月末に竣工を迎えた。当初，工事は 7 月完成を予定していたが，人手不足の影響により工期が 2 か月延長された。10 月 2 日には新築を祝う儀式「アシリチセノミ」が執り行われ，その後一般公開が始まった。

2.2 旭川市博物館・杉山一彦氏へのインタビュー（2023 年 7 月 11 日）

旭川市におけるアイヌ文化の保存・継承に関連する取り組みは，主に教育委員会を窓口として実施されてい

る。アイヌ施策推進法に基づく事業は、国からの補助金を受けて推進されており、補助率は事業費の約 80%に達する。この補助金を活用して、チセ（アイヌの伝統的な住居）の建替えが行われている。具体的には、2022 年度に予定されていたチセの建替えが、材料や人員の確保の遅れにより工期が延長され、2 か年にわたって実施された。この建替え事業にかかる費用は約 1000 万円であり、旭川市単独での財源確保は困難であるため、補助金は重要な財源となっている。

チセの建替えはおおむね 15 年ごとに実施されること一般的であり、これもアイヌ文化の保存と伝承における重要な取り組みの一環である。アイヌ文化の森伝承のコタンは、かつて国有林であった場所に 1970 年に開園され、開園後に 5 棟のチセが建設された。しかし、この場所はアイヌの集落跡ではなく、現在残る 3 棟のチセはその後の建替えにより現存している。なお、アイヌ文化の森伝承のコタンは旭川市博物館から約 30 分の距離に位置しているものの、博物館施設として十分には活用されていない現状がある。

チセの維持管理は「チセ等補修実行委員会」によって行われており、その運営は北海道ウタリ協会とアイヌ協議会の協力を得て実施されている。また、日本遺産の登録は上川町が主導しており、予算が限られている中で、日本遺産の看板設置が重要な成果とされている。嵐山チセを含む地域では、昭和 58 年（1983 年）に改修が行われ、さらに平成 11 年から 12 年にかけて小規模な建替えが実施され、平成 21 年には再度建替えが行われた。

チセの建設においては、チセ等補修実行委員会が中心となり、実際の工事は委員会の指導の下で進められた。特に、アイヌ文化の技術者として知られる工藤稠氏が相談役を務め、建設作業における技術的なアドバイスと指導を行った。また、チセの管理は旭川市博物館が中心となり、博物館担当者である杉山和彦氏が調整や管理業務を担当している。

葺き作業に関しては、チセ等補修実行委員会の委員や川村カ子トアイヌ記念博物館の副館長である川村久恵氏が担当し、川村氏は伝統的な葺き技術の継承者として、その指導と技術的サポートを行った。このような取り組みを通じて、旭川市におけるアイヌ文化の保存と伝承が積極的に進められている。

## 2.3 チセ等補修実行委員会・相談役／工藤稠氏へのインタビュー（2023 年 7 月 11 日）

### 1) 建材

- (1) 柱・梁：嵐山チセの構造には、伝統的な建築技術に基づき、柱や梁が使用されている。これらの木材は、地域で調達され、十分に乾燥させた後に加工される。特に、耐久性と強度が求められる部分には厳選された木材が

使用され、構造全体の安定性を支える重要な要素となっている。

- (2) 結束材：伝統的な上川アイヌのチセでは、建材の結束に葡萄蔓や樹皮が使用されていたとされている。しかし、現代においてはこれらの素材の入手が困難であるため、代替として釘や金物、紐など、入手しやすい材料が使用されている。特に紐に関しては、麻紐が主に使用されるが、過去には「ニペシ」（シナの木の水皮を剥いで繊維を撚ったもの）が用いられていた。ニペシは水に強い特性を持ち、長期間使用に耐えるが、準備には数年を要するため、現在では麻紐が代替品として利用されている。



図 2-1 釘と紐



図 2-2 麻紐

- (3) クマイザサ葺き：嵐山チセの屋根と壁面は、クマイザサ（*Sasa senanensis*）を用いて葺かれている。この笹は、屋根の防水性と断熱性を確保する役割を果たし、伝統的なアイヌ建築において重要な要素である。
- (4) クマイザサの調達：嵐山チセに使用したクマイザサは、主に和寒町や江丹別町の民有林で集められた。建設に携わった人の中には 50 回程現場と森林を往復し、クマイザサを収集した者もいる。クマイザサは、刈り取った後、1 枚ずつ平らに広げて乾燥させ、10 本程を 1 束にして一晩寝かせる。

## 2.4 チセ等補修実行委員会／川村久恵氏へのインタビュー（2023 年 7 月 12 日）

### 1) クマイザサの躯体への編み付け

クマイザサの編み付けに関しては、川村久恵氏の実践に基づきまとめる。川村氏は川村カ子トアイヌ記念博物館副館長を務め、2005 年に同館のチセ建設に携わっ

た経験も持つ。嵐山チセの建設作業工程の中でクマイザサの編み付け作業は全体工程の大半を占める。

- (1) **束の構成**：笹は3本1組で編むことが基本であるが、必ずしも3本でなければならないわけではなく、笹が細ければ4～5本で1束にすることもある。笹の太さや長さは、サクマ（梁）の間隔に応じて調整される。笹の長さは大体 50～60 cm を基本とするが、サクマの間隔が広ければ、笹は長めにして2段目、3段目まで届くようにすることで、壁がより厚く、丈夫になる。寄棟屋根では、妻側と平側で傾斜角が異なるため、それぞれの面でサクマの本数を調整することが求められる。<sup>注8)</sup>
- (2) **編み付けの密度**：笹を編み付ける際は、できるだけ密に編み詰めることが望ましい。間隔が狭い場合、編み作業には時間がかかるが、その分丈夫に仕上がる。
- (3) **紐**：笹を括り付けるための紐は伝統的にニペシ（シナの木のを皮を剥いて繊維を撚ったもの）が用いられていた。水に強いが用意するのに何年もかかるため現在は麻紐を使用している。柱や梁を結束する際には、葡萄蔓やコクワ（クワの一種）を使用していたこともある。
- (4) **編み始めの位置**：編み始める位置は決まっていないが、現在では通常、3か所程度から編み始め、その後は繋げていく方法が採られている。<sup>注9)</sup>
- (5) **補修**：部分的な補修は難しく、理想的には屋根全体または二面を一度に葺き替えることが望ましい。笹は10年以上経過すると劣化が進みやすく、立地条件にもよるが、補修の頻度や方法については確立された方法がない。

## 2.5 実測調査

本研究では、チセの実測調査を通じて、躯体の形状を正確に記録し、平面図および断面図を作成した。最初の実測調査は、躯体が完成した直後の2022年5月6日に実施。2回目の実測調査は竣工後の2023年7月11日に実施した。チセの構造が自然素材を用いており、手実測による形状記録が困難であったため、写真測量法を用いて実測を行った。写真測量については、以下の手順でデータ収集と図面作成が行われた。

- (1) **写真撮影**：11.5m の一脚棒にアクションカメラを取り付け躯体の写真を撮影。竣工後はドローンで外観を撮影。
- (2) **3D モデルの作成**：撮影した写真を metashape で合成し3Dモデルを作成。[図2-21～22, 図3-2～3]
- (3) **3D モデルの編集**：RhinoCeros で3Dモデルを切断し平面図、断面図を作成。
- (4) **3D モデルより平面図・断面図を作成**：RhinoCeros の

データを AutoCAD へ書き出し。[図2-15～19]

調査の結果、母屋は屋根の中心から 53mm、セムは屋根の中心から 510mm の位置で偏心していることが明らかとなった。[図2-16]この偏心は、チセ建設時に図面が作成されず、全ての寸法が棟梁の過去の経験と身体感覚に基づいて決定されたために生じたものである。



図 2-3 建設中の嵐山チセ・外観（2022 年 5 月）



図 2-4 クマイザサの躯体への編み付け（2022 年 5 月）



図 2-5 建設中の嵐山チセ・内観（2022 年 5 月）



図 2-6 躯体に編みつけられたクマイザサ（2022 年 5 月）



図 2-7 嵐山チセ・建設中外観（2022 年 7 月）



図 2-8 嵐山チセ・建設中外観（北側立面）（2022 年 7 月）



図 2-9 嵐山チセ・建設中セム内観（2022 年 7 月）



図 2-10 嵐山チセ・建設中母屋内観（2022 年 7 月）



図 2-11 クマイザサが生える山の様子（2022 年 7 月）



図 2-12 枝の部分は 60cm 以上を残す（2022 年 7 月）



図 2-13 クマイザサを束ねる作業の様子（2022 年 7 月）



図 2-14 束ねたクマイザサ（2022 年 7 月）

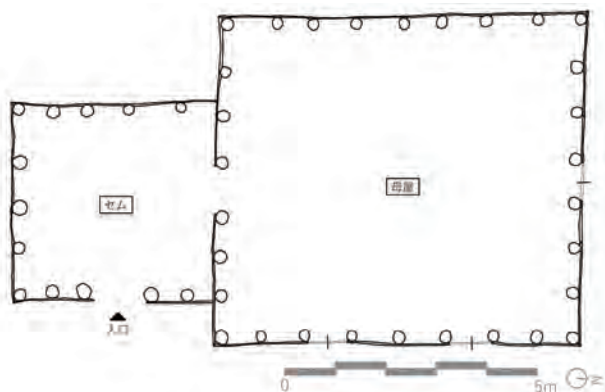


図 2-15 嵐山チセ（建設中）・平面図

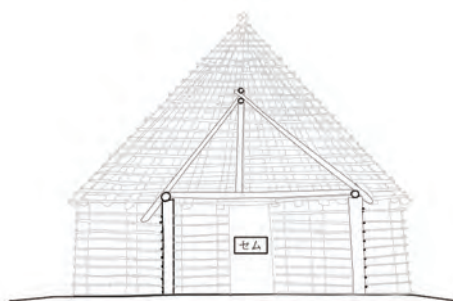


図 2-16 嵐山チセ（建設中）・セム・短手断面図

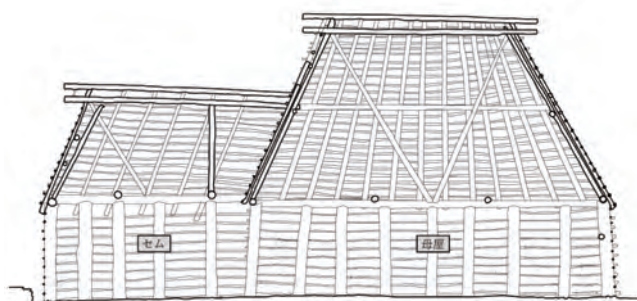


図 2-17 嵐山チセ（建設中）・長手断面図

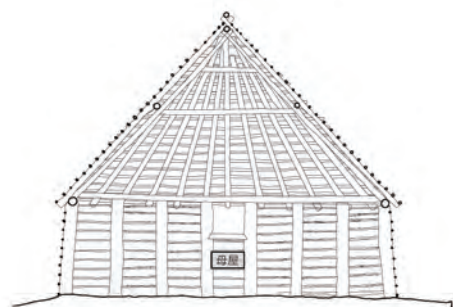


図 2-18 嵐山チセ（建設中）・母屋・短手断面図

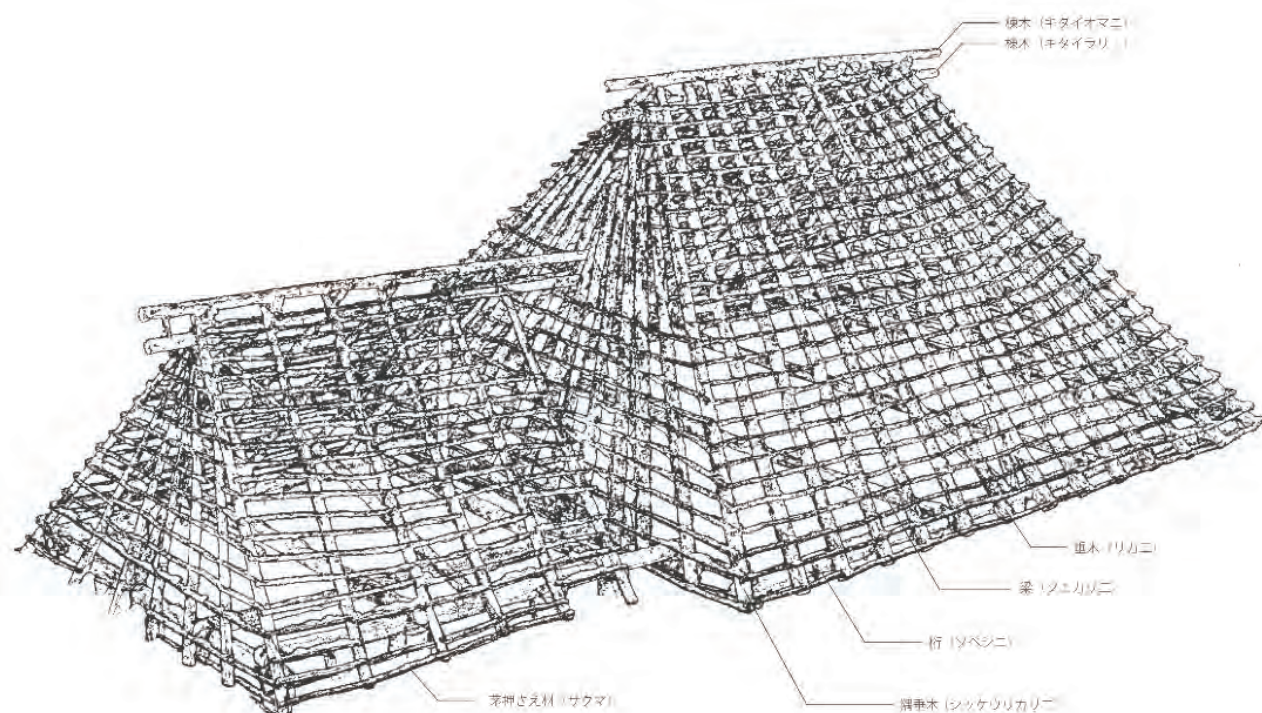


図 2-19 嵐山チセ・小屋組

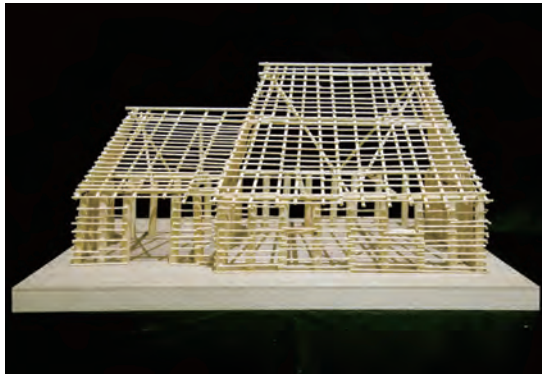


図 2-20 嵐山チセ・模型  
\*図 2-15~18 の図面から制作した模型



図 2-21 嵐山チセ・屋根 (2023 年 7 月)



図 2-22 嵐山チセ・3D モデル (2023 年 7 月)

### 3. 上川町チセ

#### 3.1 上川町チセの概要

上川町チセは寄棟造平入の木造平屋建であり、屋根と壁は共にクマイザサ葺である。母屋とセムから成り、母屋の寸法は桁行 7,200mm、梁間 4,500mm、セムの寸法は桁行 2,700mm、梁間 2,700mm、建築面積は約 39.69m<sup>2</sup>である。

地域の文化や歴史を後世に伝えていくことを目的として、地元のアィヌを中心に 2016 年、上川町の旧北の森ガーデン内に建設された。旧北の森ガーデンは 2021 年に営業を終了し閉園したが、チセは観光客が自由に見学できるほか、アィヌの儀式であるカムイノミ等に利用されている。

#### 3.2 棟梁・伊澤修一氏へのインタビュー(2022 年5月6日, 7月27日)

チセの建設には、約 20 人の関係者が関与しており、作業は伝統的な技術と現代の工具を組み合わせで行われている。柱にはヤチダモが使用されており、昔ながらの結束材としてはシナの皮やイラクサが用いられていたが、

現在では釘などの金属製の結束材が使われるようになった。また、外装材としてはクマイザサが使用される。クマイザサの葉は、9月に収穫されたものが最も品質が良いとされており、刈った葉は一晩寝かせてから使用される。

建設道具として昔は石斧などの手工具が使用されていたが、現在ではチェーンソーやその他の電動工具が導入され、作業効率が向上している。さらに、ゴザの編み込みにはガマグサ(メス)が使用され、伝統的な技法で編まれる。2016年のチセ建設時には、クマイザサの編み付け作業が6人で行われ、そのうち1人のみが編み方を知っていた。かつては15人ほどが編み方を習得しており、全員が編み方を熟知していたため、作業のスピードは非常に速かったとされている。

寸法については、尺貫法が使用されており、これは木彫りの製品など他の伝統工芸にも共通する方法である。また、チセの設計において、入り口の位置は倉庫としての使用を考慮して意図的に中心からずらされて配置されており、元々の設計意図とは異なる位置に設定されている。[図 3-5]このような配置変更は、倉庫機能を最大限

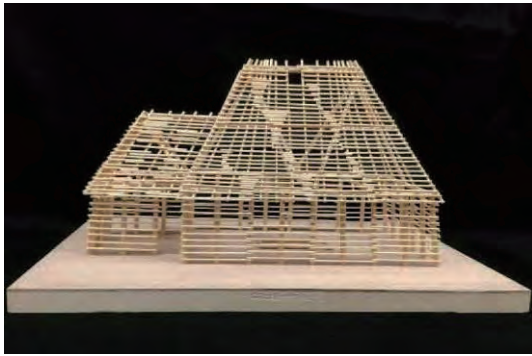


図 3-1 上川町チセ・模型

\*図 24-25 の図面から制作した模型。  
屋根の高さは現況に合わせて変更



図 3-2 上川町チセ・屋根 (2022 年 7 月)



図 3-3 上川町チセ・3D モデル (2022 年 7 月)

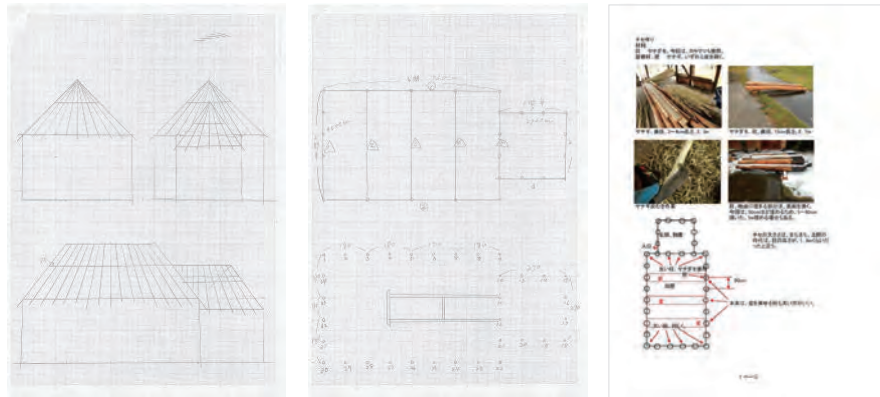


図 3-4 上川町チセ・建設時に作成された図面や建設手順に関する資料の例

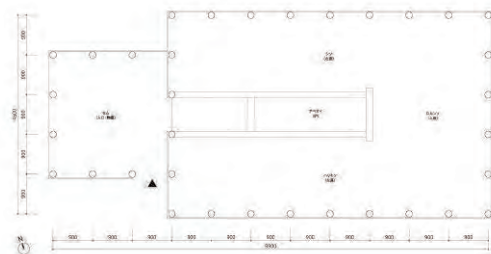


図 3-5 上川町チセ・平面図

\*受領した資料から作成

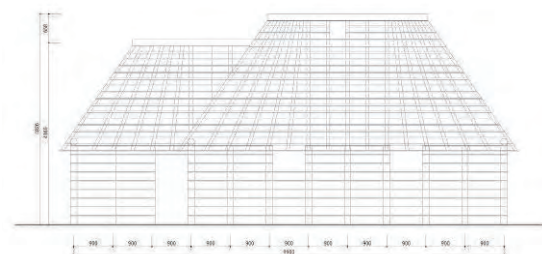


図 3-6 上川町チセ・立面図

\*受領した資料から作成

に活かすために行われた調整である。上川は元々人が住むような場所ではなく、和人もいなかった。伊澤家も新十津川から木彫りの商売をするために移住してきた。

### 3.3 一般社団法人ペニウングルより受領した資料

2016 年の建設時に作成した図面及び建設記録として撮影された写真を（一社）ペニウングルより受領。以下にその内訳を示す。

- ・ 方眼紙（A4 サイズ）に手描きで画かれた図面（合計 3 枚受領）[図 3-4, 左 2 点]
- ・ A4 サイズ 11 枚の資料（カラー写真 63 枚、ダイアグラム 18 点を含む）[図 3-4, 右 1 点]

## 4. 考察

本研究で取り上げた 2 棟の復元チセの建設工程からはいくつかの共通点が見出される。建設工程は、①柱の立て込み、②小屋組みの組み立て、③外装材の葺き付け、④内装の仕上げという 4 つの主要な工程に分けることができる。伝統的には、小屋組みは地面で行い、その後それを上げる方法が取られていた。しかし、作業人数の減少や部材の重量化により、現代においては人力で屋根を上げることは困難となっている。

1968 年の嵐山公園における復元と現在の復元を比較した結果、部材の接合方法や使用される道具・工具に顕著な変化が見られたことが明らかとなった。復元チセは、展示目的や祭祀空間としての機能を十分に果たすために、安全性や収容性、耐久性の向上が求められており、これに伴い建設方法にも変化が生じている。また、作業人数の減少により、効率的な建設方法が求められ、接合部の結束には工業製品や現代的な工具が多く使用されるようになっていく。

一方で、伝統的な自然材料を用いた部材の接合方法については、『チカプニコタンのウラッチセ』や『上川アイヌの研究』などの資料において記録として伝承されており、これまでの復元過程でも実践され、現在に至るまで継承されている。今後も、現代建築技術や工業製品の導入が進むことが予想されるが、伝統的な技術の保存と活用を重視しつつ、現代技術を効果的に取り入れることが重要であり、その相互補完的なバランスを保ちながら進めることが求められると考える。

## 5. まとめ

上川・旭川地域における復元チセの建設は、1910 年代から現在に至るまで、計 26 回にわたり実施されており、主に文化伝承者を中心とした取り組みとして行われてきた。しかし、近年では伝承者の減少や後継者の不足、さらには自然材料の調達の高コストといった課題が顕在化している。本研究では、これらの課題に対応するため、復元チセの建築図面および 3D モデルの作成を行い、口頭伝承による技術や知識を補完するための資料を作成した。

## <謝辞>

本研究を進めるにあたりご協力及びご助言をいただきました旭川市博物館、チセ等補修実行委員会、川村カ子トアイヌ記念館、一般社団法人ペニウングル、伊澤家の皆様、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、株式会社アトリエブシの皆様に感謝申し上げます。

## <注>

- 1) チセはアイヌ語で家を意味する。
- 2) ペニウングルは「石狩川上流の人」（アイヌ文化史辞典、吉川弘文館、2023 年）
- 3) 昭和 43 年度（1968 年度）に行われた上川アイヌの研究その 2 近文地方における住居（嵐山公園アイヌの笹小屋のスライドを中心として）には「この地方において純粋なアイヌの家とすでになく、昭和 33 年に市が皇太子御来道記念として嵐山公園に建てた笹小屋があったが老朽化していた。たまたま、旭川市郷土博物館より市が開道百年を記念して元の場所に道文化財保護功労者尾沢カンシヤトクさんをわずらわし建築するとの報をいただき、9 月 11 日より完成の 10 月 5 日まで現地に山越えすること数回、古式豊かな地鎮祭からアイヌ独特の建築様式、上川地方独特の笹屋根の編み方、落成式の行事まで生きた資料を故老に学び記録とスライドに収めることが出来た。」とある。
- 4) 一般社団法人ペニウングルはアイヌと和人が協働してアイヌ文化を保存・継承するために 2021 年 11 月に設立された団体。
- 5) No. 1-4 の建設年は旭川市博物館所蔵品目録 XII より、No. 5 は川村カ子トアイヌ記念館、No. 6 は一般社団法人ペニウングルの聞き取り調査により明らかになった。
- 6) 小林の研究では近世以前のチセは全て平面形状に歪みがあると報告されている。
- 7) セムはアイヌ語で物置、モセムは入口兼物置を意味する。
- 8) 旭川竜谷高等学校郷土部（編）の 1968 年の報告書には笹は 3 本、1996 年の報告書には笹は 5 本とある。2022 年の嵐山チセの建替えの際に笹編みを担当した川村カ子トアイヌ記念博物館副館長である川村久恵氏によると笹の本数に決まりはなく、葉の大きさと本数を調整すること。
- 9) クマイザサの編み方については「チカプニコタンのウラッチセ」に詳しく記載されている。

## <参考文献>

- ・ 鷹部屋福：北方圏の家、彰国社、1943 年
- ・ 旭川竜谷高等学校郷土部（編）：その 2 近文地方における住居、旭川竜谷高等学校郷土部、1968 年
- ・ 萱野茂、須藤功：チセ・ア・カラ われら家をつくる、未来社、1976 年
- ・ 平沢勇：チセの屋根について—その強度と検討方法—

- ・ 市立旭川郷土博物館研究報告 第16号別刷，1986年
- ・ 旭川竜谷高等学校郷土部（編）：その31 近文地方における住居—近文地方の住居チセのミニチュア復元—旭川竜谷高等学校郷土部，1996年
- ・ 北海道立アイヌ民族文化研究センター：ボン カンピソシ 4 アイヌ文化紹介小冊子 チセ 住まい，1999年
- ・ アイヌ文化振興・研究推進機構：アイヌ民族博物館：アイヌ文化生活再現マニュアル 建てる【祖先の時代のチセづくり】，2000年
- ・ 旭川市博物館：旭川市博物館所蔵品目録 XII—民族資料／住居関係一，厚友会，2002年
- ・ 由良勇：チカプニコタンのウラッチセ，マルヨシ印刷株式会社，2006年
- ・ 旭川竜谷高等学校郷土部：上川アイヌの研究 I・II，旭川竜谷高等学校郷土部，2008
- ・ 小林孝二：アイヌの建築文化再考—近世絵画と発掘跡

- ・ からみたチセの原像一，北海道出版企画センター，2010年
- ・ 平山裕人：アイヌ地域史資料集，明石書店，2016年
- ・ 北海道博物館：ビジュアル北海道博物館，北海道歴史文化財団，2020年
- ・ 関根達人，菊池勇夫，手塚薫，北原モコットウナシ：アイヌ文化史辞典，吉川弘文館，2022年

#### ＜研究協力者＞

|       |                    |
|-------|--------------------|
| 山根佑介  | 芝浦工業大学大学院建築学専攻修士課程 |
| 三角桂   | 同上                 |
| 浦山真   | 同上                 |
| 葛谷友香  | 芝浦工業大学建築学部建築学科学士課程 |
| 瀧口輝   | 同上                 |
| 増田晋之介 | 同上                 |